清流

題字：芳野充

令和6年5月30日
第89号

発行所　加来不動産㈱
発行者　加来　寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

思いやりの優先順位

以前は、「外ではいい顔するけど、家ではぜんぜんちがうよね」と、ことあるごとに妻が口にしていました。それに対して「そらそうやろ」と言い返しては、お互いに不機嫌になることが度々ありました。

当時をふり返ると、お客様を大切にすることで仕事をいただき、それで家族を養っているのだから「そらそうやろ」となることは、当時のわたしとしては、至極当然の考えでした。

一方で、仕事で知り合ったお客様を出先で見かけると、見つからないように身をひそめたり、きびすを返すように逆方向へと足を向けていました。それは、仕事とプライベートでの人物像を切りかえていたため、仕事以外でやり取りするのがわずらわしいという思いが働いていたからです。つまり、本当の意味でお客様を大切にできていなかったと思います。

しかし、素心学と出会い、素直になることや思いやりの大切さを学んでいくと、わたしはまちがった考え方による、まちがった行動を取りつづけていることに気づかされました。その最たるものが、思いやりの優先順位でした。

素心学では思いやりの定義を、「相手に不快さを与えない」。そのうえで「安心と喜びを与える」としています。また“あえて”思いやりを向ける優先順位をつけるのであれば、「家族」「職場の人たち」「お客様」の順であることも学びました。念のためにつけ加えておくと、家族を特別あつかいするという意味でも、お客様をないがしろにする、ということでもありません。

優先順位の話を聞いた当時は、「まったく逆じゃないか」と思ったものですが、根幹となる「家族」に思いやりをむけることの大切さを、時間の経過とともに理解し、実感するようになりました。

それは、一番身近な妻（夫）や子ども、親や兄弟にえがおで接することができる、あるいは相手を気づかいやさしい言葉がけするなどの思いやりの行動ができなければ、本当の意味で職場の人たちやお客様に思いやりを向け、相手を大切に思う気持ちが生まれることはむずかしい、と感じるようになってきたからです。

一番わがままの出やすい家族に対して、思いやりの行動がとれるようになると、家族との人間関係が良好になってきますので帰宅すると、家庭がとても心地よく、おだやかな時間がふえるような気がします。それは自分の心を安定させ、家族だけではなくまわりの人たちにも自然と思いやりの行動がとれやすくなるのではないでしょうか。

加来　寛